

# 阿保遺跡第2地点24次発掘調査報告書



報告書抄録								
ふりがな	あほいせきだいじちてん24じはつくつちようきほうこくしょ							
書名	阿保遺跡第2地点24次発掘調査報告書							
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第101集							
編著者名	山下 大輝							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和2年(2020年)3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あほいせきだいじちてん 阿保遺跡第2地点	ひょうごけんあほいせき 兵庫県姫路市阿保字 あほいせき 明神乙332番5の一部	28201	020573	34°	134°	2019.6.18	21㎡	住宅建設
				49'22"	42'35"	—		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		遺跡調査番号		
阿保遺跡第2地点	集落跡	古代・中世	柱穴・溝	須恵器、土師器		20190125		

- 例言**
1. 本書は、姫路市が事業費の委託を受けて実施した、姫路市阿保字明神乙332番5の一部に所在する阿保遺跡第2地点(県遺跡番号020573)の発掘調査報告書である。
  2. 発掘調査の実施ならびに本報告書の発行に際しては、事業費に多大なるご協力を頂いた。
  3. 発掘調査及び報告作業、報告書の編纂は、姫路市埋蔵文化財センターが実施した。
  4. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

- 凡例**
1. 発掘調査で行った測量は、世界測地系(測地法第2000)に準拠する平面図点角標高系V系を基準とし、数値12m単位で表している。
  2. 本書で用いる標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
  3. 土色は、小山正志・竹原博編2003『新編 標準土色図 31版』日本色研事業株式会社に準拠した。
  4. 遺跡番号は基本図に通り番号とする。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第101集  
阿保遺跡第2地点24次発掘調査報告書

編 集 姫路市埋蔵文化財センター  
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1  
発 行 姫路市教育委員会  
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地  
発 行 日 令和2年(2020年)3月31日  
印 刷 ・ 製 本 松尾印刷株式会社  
〒671-0222 兵庫県姫路市別所町小林494番地

2020

姫路市教育委員会

## 第1章 調査に至る経緯

姫路市阿保字明神乙332番5の一部において住宅建設が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である阿保遺跡第2地点（県遺跡番号：020573）に該当しているため、文化財保護法第93条第1項の規定に基づき、平成31年2月14日付けに姫路市教育長宛に届出がなされた。これに基づき、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課が届出内容を精査の上で事業者と調整を行い、工事に先立ち事業地内の埋蔵文化財の保存状況等を確認するために確認調査を実施することになった。調査の結果、遺構・遺物が確認されたことから事業者と取扱い協議を行い、地下の遺構が影響を受ける部分を対象に本発掘調査を実施することとなった。調査面積は21㎡で遺構面は1面である。

## 第2章 調査地の位置と周辺の歴史的環境（図1）

調査地は市川西岸から約200mの地点である。阿保の歴史は古く、『播磨国風土記』の「英保里」に比定されている。調査地周辺では、平成14年度から区画整理事業に伴う発掘調査が行われている。それらの調査成果を概観すると、弥生時代中期・後期の堅穴住居跡や奈良～平安時代の掘立柱建物跡のほか、鎌倉時代・室町時代など各時期の遺構が検出されている。

平成21年度の調査では奈良時代の大型掘立柱建物跡が検出されており、検出地点から北西約100mに位置する市之郷廃寺に関連した施設の可能性が考えられている。

## 第3章 遺構

基本層序は現代盛土、耕土（図2・5・7層）、遺物包含層（図2・8・9層）を経て地山（図2・10層）に至る。現地表の標高は11.2～11.3m、地山の検出標高は10.6mである。遺構は全て地山面で検出した。遺構の概要は以下のとおりである。

**ピット** 確認調査時に調査したものを含めて8基検出した。SP1は径0.15m・深さ0.28m、SP2は径0.23m・深さ0.25m、SP3は径0.1m・深さ0.11m、SP4は径0.06m・深さ0.08m、SP5は径0.05m・深さ0.08m、SP6は径0.2m・深さ0.18mを測る。SP7は径0.31m・深さ0.47mを測る。0.13mほどの石2個と少量の遺物が埋土から出土した。SP8は径0.4m・深さ0.3mを測る。埋土からは、根石と考えられる0.11～0.23mの石を検出した。

平面規模においては、SP 1・2・6、SP3～5、SP7・8とで大別することができるが、それらの性格については判然としない。なおSP2からは須恵器・陶磁器、SP3からは弥生土器・土師器、SP4からは須恵器、SP1・5・6からは土師器が出土した。いずれも小片のため時期は不明である。

**SD1** 東西方向に延びる溝を調査区北端で検出した。検出部の規模は、東西長3.72m・幅0.35m・深さ0.15mである。掘方の北肩部は、調査区外となるため本来の幅は不明である。断面形状は緩やかなU字状を呈す箇所と逆台形状を呈する箇所を確認した。埋土から土師器・須恵器の小片が少量出土した。

## 第4章 遺物

遺構に伴う遺物は全て小片であり、その詳細は判然としない。検出面上層の包含層から土師質の土鐘が出土した。長さ3.3cm・厚さ1.15cmである。孔は直径約0.3cmを測る。外面には指で押さえた痕が残る（図2-1）。

## 第5章 総括

今回の調査では、掘形底に根石を据え付けたピット2基のほか溝を検出した。遺構の時期は判然としないが、SD1については須恵器が出土したことから古墳時代以降に埋設したものと考えられよう。今後周辺における調査成果の更なる蓄積を待ちたい。

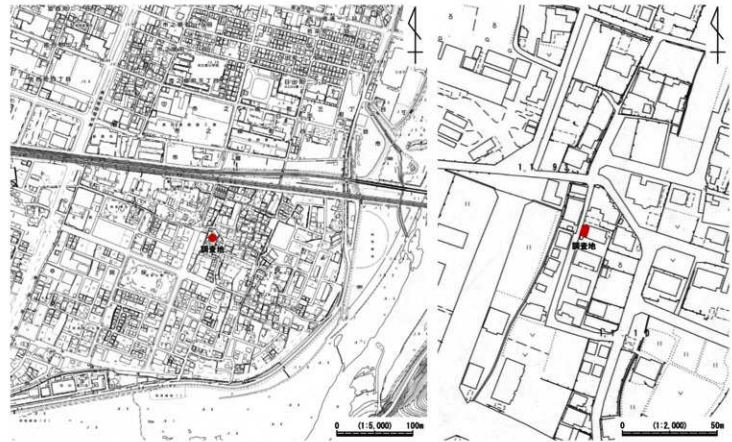


図1 調査位置図

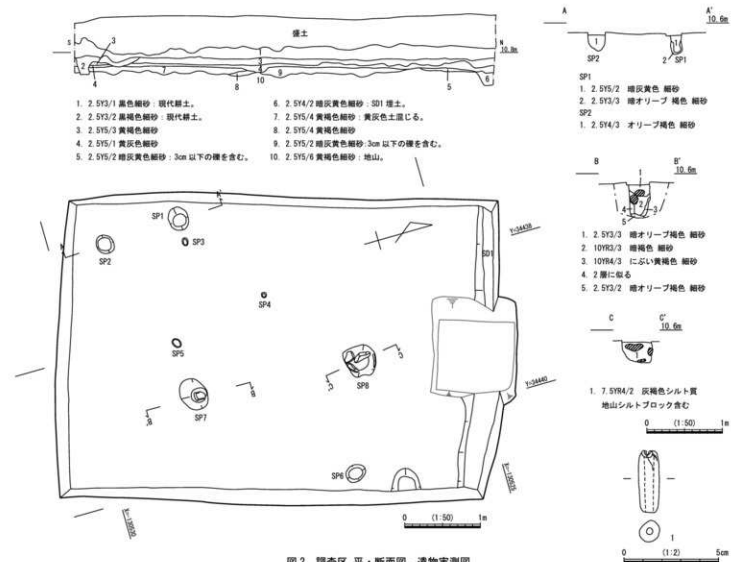


図2 調査区 平・断面図、遺物実測図